

## 小特集①

## アマゾンで僧侶派遣サービス開始

葬儀関連会社の「みんなび」(東京都新宿区)が、2015年12月8日からインターネット通販大手アマゾンジャパンのサイトを通じ、葬儀以外の法事や法要で読経する僧侶を定額で希望の場所へ派遣するサービス「お坊さん便」の受注を開始した。以下では、サービスの概要とそれをめぐる仏教界の動向、さらに利用者の声を簡単にまとめることとする。

## 1. サービスの概要

料金プランは自宅など手配先への訪問のみの場合、35,000円。自宅から墓地など手配先からの移動を含む場合は45,000円。20,000円を追加することで戒名を授与してもらうプランもある。全国どこにでも手配可能で、料金には読経・法話、お膳料、車代、心付けが含まれている。事前打ち合わせが必要なため、最短で2週間前からのプランの購入となる。初回は宗派の指定は可能だが、僧侶の指名はできず、2回目の利用から僧侶個人を指名できる仕組みとなっており、料金の支払いはクレジットカードのほか、コンビニ決済やネットバンキングなども利用可能。プランを購入すると、「みんなび」から確認のメールが送られ、日時や目的、宗派を返信すると、注文内容が記載されたチケットが郵送で届く。その後、僧侶本人から購入者に電話があり、待ち合わせ場所の確認、故人についてのヒアリングが行われ、当日指定の場所で法事が執り行われる。

「みんなび」は2009年から葬儀準備の支援サイトを運営。都市化や核家族化の影響により、「法事などで読経をしてもらいたいものの、お寺との付き合いがない」「お布施やお車代の相場がわからない」といった声が多く寄せられたことから、13年5月から葬儀や法事での僧侶派遣の受け付けを開始した。14年の受注件数は13年の3倍となる約8千件で、現在は7宗派(浄土宗、真言宗、曹洞宗、臨済宗、天台宗、浄土真宗、日蓮宗)の僧侶約400人と提携。アマゾンでの僧侶派遣には通夜・葬儀は含まれず、法事・法要に限定される。今回のアマゾンでの受注開始について、「みんなび」の担当者は「ネット時代のニーズに応え、心のかもった僧侶を多く派遣したい」「情報収集に活用されるレビュー機能の充実したアマゾン内で展開することで受注件数が増えれば」などと話している(スポーツニッポン・東京12/8、週刊ポスト12/25号ほか)。

## 2. 仏教界の動向

こうした動向を受け、全国の主要宗派でつくる「全日本仏教会」(全日仏)の齋藤明聖理事長は12月24日、「宗教行為をサービスとして商品にしている」との談話を発表した。談話のなかで「お布施はサービスの対価ではない。諸外国の宗教事情を見ても、このようなことを許している国はない」と指摘。「アマゾンの宗教に対する姿勢に疑問を禁じ得ない」とし、年明けにもアマゾンにサービスの取り扱い中止を要請することも検討している(産経・東京12/25)。

全日仏は葬儀業に参入した大手スーパーのイオンが2010年に葬儀の際に僧侶を紹介するサービスを開始した際も「お布施がギャラのように表示され、戒名を売買している印象を与える」などとして、料金表示の中止を申し入れた[→『ラク便り』48号27頁「小特集イオン「お布施の目安」

問題とその意義」参照]。仏教界がこのように神経をとがらせるのは、僧侶自身の宗教的信念にそぐわないという点もあるだろうが、宗教行為の「商品化」が拡大することで、宗教法人に対する税制優遇の根拠が揺らぎかねないとの懸念もある。現状では、僧侶個人が得た布施は所得税の課税対象になるが、宗教法人が得た布施は喜捨（寄付）とみなされ、法人税は非課税。「お坊さん便」では、サービスを手掛ける「みんなれび」側の所得は課税対象であるが、僧侶側が取り分を納税するかは僧侶自身に委ねられている。宗教法人と税務当局は、宗教とビジネスの課税をめぐる線引きで「緊張関係」にあり、近年では都心のビル型納骨堂に東京都が固定資産税をかけたのに対し、宗教法人が墓地と同様に非課税であることを主張して提訴に踏み切っている（朝日・東京 12/26）。

こうしたなかで仏教界からは「僧侶は物ではない」「クレジットカード決済では僧侶に対する謝意が薄れる」といった批判の声もあがっているが、決して一枚岩ではない。「みんなれび」と提携している僧侶がいることが物語っているように、僧侶派遣サービスは、寺院を持たない僧侶や、檀信徒が少なく寺院運営に苦しむ住職の経済的な受け皿となっている。「みんなれび」によれば、「お坊さん便」がアマゾンに出品された当日、利用者からの問い合わせ以上に、僧侶から登録したいとの電話が殺到したという。

さらに、寺院と人々との関係性の変化を見据え、こうしたサービスの受け入れに前向きな僧侶もいる。『寺よ、変われ』（岩波新書、2009年）などの著作がある高橋卓志・神宮寺（長野県松本市）住職は、直葬の広がりなどから「檀家制度」を嫌う人々の存在に注目し、そうした人々への対応が必要であるとする。檀家制度を廃止した見性院（埼玉県熊谷市）の橋本英樹住職は、「みんなれび」と提携する僧侶の一人で、「異論は承知のうえ。批判にさらされることで、仏教界に必要なことが見えてくる」としている（市民タイムス・松本 12/17、週刊ポスト 12/25号、朝日・東京 12/26）。

### 3. 利用者の声

では、当の利用者の声はどうだろうか。妻の一周忌で「お坊さん便」を利用した神奈川県男性（64）は、「初めてあった僧侶が妻を供養してくれたことに違和感はありませんでした。地方出身者で菩提寺がない、お坊さんとの個人的な付き合いもない人には利用価値はあると思いました」と語る。同県で父親の葬儀の際に利用した男性（67）は、「葬儀社には僧侶を呼ぶと20万円以上かかるといわれたが、半額以下で済んだ。しっかり供養してくれたら誰に頼んでも大差ない」と話す（週刊ポスト 12/25号、朝日・東京 12/26）。

このようにして檀家制度の枠組みに収まりきれない形で供養を望む人々がいるとともに、菩提寺住職らの態度をめぐって既存の寺檀関係に不満を持つ人も少なくない。そうしたなかで、僧侶派遣サービスは拡大化しているようであり、現在、少なくとも10以上の団体が、「みんなれび」と同様のサービスを展開しているとされる（毎日・東京 12/29）。

筆者の確認によると、「お坊さん便」を販売するアマゾンのサイト上では12月31日までに、同サービスに対するカスタマーレビューが40件投稿された。購入者のレビューは1件にとどまり、ほとんどが未購入者によるものである。サービスをめぐって賛否両論飛び交っているが、サービスの開始という話題性に乗じて、僧侶を笑いのネタとするような「ネタ投稿」も目立っている。

[文責：相澤秀生]